



前霊宝館長 長澤光倫様ご寄付により植樹された石楠花

霊宝館だより

霊宝館だより 第88号

平成20年8月5日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

(財)高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話0736-56-2029

URL <http://www.reihokan.or.jp>

現在 第29回大宝藏展 開催中

「高野山の名宝」

2008年7月19日(土) ~ 9月15日(月)

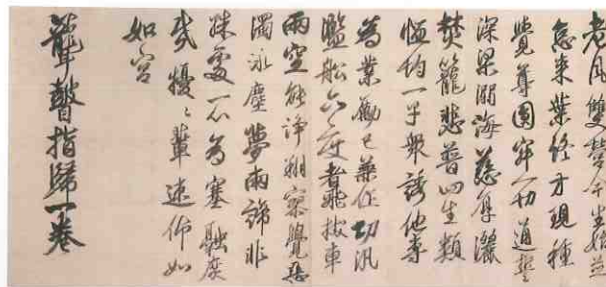
第29回大宝蔵展

「高野山の名宝」開催中

平成20年9月15日(月)まで



国宝 沢千鳥螺鈿時絵小唐櫃



国宝 響誓指帰(下巻)



阿耨多童子像



鳥俱婆識童子像



矜羯羅童子像



制多伽童子像



恵喜童子像



清浄比丘像



恵光童子像



指徳童子像

霊宝館では「高野山の名宝」と題しまして、山内寺院の名宝を出陳いたしております。今回はシリーズ全三回の内の第二回目となり、山内寺院の内、十七カ院の名宝がその対象となっております。

高野山は真言密教の道場として開かれましたが、時には他宗派やそれらの人々をも柔軟に受け入れる包容性をも兼ねそなえていて、さまざまな信仰を同居させつつ今日までの歴史を歩んできました。それは密教の聖地高野山でありながら、浄土系美術品や阿弥陀如来像の多さなどからも理解することができます。

一方、密教系の代表仏ともいえる不動明王の信仰なども、大変盛んであったことが分かります。今回の展示のメインともなる不動明王八大童子像などは、鎌倉時代における不動信仰の一端を示すものとして、さらには密教芸術の至宝としても大変優れた作品として知られています。

高野山に伝わる名宝の数々は、祈りや信仰から生まれたものばかりといっても過言ではありません。各時代を通じて人々はそのような願いを込めて祈ったのか、また造仏師や仏画師はいかにして仏を崇高な姿として表現したのかなど、今回の出陳作品から感じ取っていただければと思います。



漢書 (周勃伝残闕 紙背六種火壇図)



国宝 仏涅槃図

主な出陳品

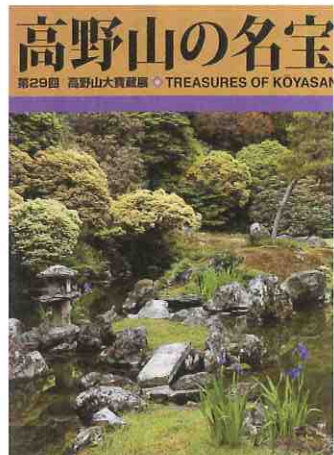
国宝

- ・矜羯羅童子像 金剛峯寺
- ・制多伽童子像 金剛峯寺
- ・恵光童子像 金剛峯寺
- ・清浄比丘像 金剛峯寺
- ・恵喜童子像 金剛峯寺
- ・烏俱婆譏童子像 金剛峯寺
- ・指徳童子像 金剛峯寺
- ・阿耨多童子像 金剛峯寺
- ・沢千鳥螺鈿時絵小唐櫃 金剛峯寺
- ・仏涅槃図 金剛峯寺
- ・勤操僧正像 金剛峯寺
- ・髻髻指帰 (下巻) 金剛峯寺
- ・釈迦如来及諸尊像 (枕本尊) 普門院
- ・不動明王坐像 (不動堂旧在) 金剛峯寺
- ・毘沙門天立像 正智院
- ・毘沙門天像 光台院
- ・阿弥陀浄土曼荼羅図 西禅院
- ・大和州益田池碑銘並序 釈迦文院
- ・崔子玉座右銘断簡 宝亀院
- ・即身成仏品 金剛峯寺
- ・増巻阿含経卷第三十二 金剛峯寺
- ・漢書 (周勃伝残闕 紙背六種火壇図) 大明王院
- ・大日如来像 (西塔旧在) 金剛峯寺
- ・阿弥陀如来及両脇侍立像 不動院
- ・天弓愛染明王像 金剛峯寺
- ・大日如来像 (谷上大日堂旧在) 金剛峯寺
- ・阿弥陀如来坐像 金剛峯寺
- ・釈迦如来坐像 金剛峯寺
- ・四天王立像 (快慶作) 金剛峯寺
- ・阿弥陀如来坐像 金剛峯寺
- ・不動明王立像 金剛峯寺
- ・毘沙門天立像 金剛峯寺

重要文化財

- ・阿弥陀如来坐像 地藏院
- ・不動明王立像 金剛峯寺
- ・狛犬像 天野社
- ・愛染明王像 金蔵院
- ・不動明王立像 釈迦文院
- ・大日如来像 西南院
- ・大日如来像 安養院
- ・薬師如来坐像 高室院
- ・兜跋毘沙門天立像 親王院
- ・薬師如来坐像 五大院
- ・毘沙門天立像 普賢院
- ・孔雀明王像 金剛峯寺
- ・普賢延命菩薩像 正智院
- ・文殊菩薩像 宝寿院
- ・孔雀文磬 蓮花院
- ・覚禅鈔卷第七八 (八大童子) 西南院

第29回大宝蔵展 「高野山の名宝」 図録 販売中



¥1200

今回の図録はシリーズ本全3巻の内2巻目の図録です。「高野山の名宝」と題し、山内寺院の内、17カ院の名宝をご紹介します。

霊宝館では、図録だけではなく、たくさんのおリジナル商品を販売しております。

ご購入方法は、インターネット、電話、FAX、Eメールにてお問い合わせいただけます。

高野山霊宝館ホームページ
http://www.reihokan.or.jp/ind
ex.html

収蔵品の紹介 62

重要文化財

孔雀明王像

木造彩色 像高78.8cm

鎌倉時代

金剛峯寺



孔雀明王は、両翼を広げ尾を光背のように展開した孔雀の背に乗る姿の明王です。

どうして孔雀に乗っているのでしょうか。わけを知るには、インドまでさかのぼらないといけません。

コブラをはじめとするインドの毒蛇は、人間に害を与えるので、たいそうこわがられます。蛇使いのように、笛を吹いて蛇を飼い慣らす方法もあります。毒蛇をやっつけてくれる動物にお祈りする方法もありました。孔雀がそうです。孔雀は蛇に向かい合ったとき、わざと弱ったふりをして自分の体に巻つかせ、蛇が襲いかかろうとする瞬間、いつきにつばさを広げて撃退するのだそうです。こうした孔雀の力はやがて神様



孔雀明王像

のように扱われ、鳥ではなくホトケの姿に結晶していきました。それが孔雀明王なのです。

腕の持ち物は、蓮華、孔雀の尾羽根、吉祥果、俱縁果です。

吉祥果とは仏教語で、鬼子母神が手に持つ果実で、柘榴のことです。俱縁果とは、インドで産出されるミカンに似た果物です。

これらの持ち物は、それぞれに神秘的な意味がありました。右手の孔雀の尾は、災難をはらう力がありました。二番目の右手の吉祥果は鬼を撃退する霊力を持つ果実です。左手のまるい俱縁果は、これを食べると元気がでるといふ果物です。二番目

の左手の蓮華はホトケの慈悲をあらわします。これらの持ち物は、孔雀明王の不思議な働きを示しているのです。

本像は伽藍孔雀堂の本尊で黒漆地の胎内膝裏部に「巧匠安阿弥陀仏快慶」という朱書銘（銘そのものは後代に書き直されたもの）があり、快慶の作として知られています。

造像の時期はこの快慶の造像銘記や後鳥羽上皇の御願により、東寺長者延泉が建立し孔雀堂が正治二年（一一〇〇）に落慶していることなどから、ほぼその頃であろうと思われま

ザクロ・石榴・柘榴・安石榴

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

この度は、花の咲く時期でも、果熟期でもない、しかも外来のザクロ科の落葉中高木のザクロを紹介します。

その理由は、高野山霊宝館で、七月六日まで行われた企画展「童子とほとけ」にちなんで、「霊宝館だより」の六月三十日発行・第八十七号において、詞梨帝母（鬼子母神）と吉祥果（ザクロ）について、紹介があったこと、七月十九日から同館で開催されている第二十九回大宝蔵展「高野山の名宝」に出陳されている国の重要文化財・孔雀明王像（四臂）の持ちもの一つ吉祥果と呼ばれているものが、その形状からザクロであろうと思われることなどです。

ザクロはペルシャ・西アジアの原産といえます。

前漢（前二〇二年〜後八年）の外交特使・張騫という人が長年にわたる西域での生活のうちに、彼の地でその存在を知り、その後、中国に輸入されて栽培されたと伝えられています。

インドやその周辺では、中国よりはるかに古い時代から植栽されていたと推理され、現地で、現在はアナル、デリマなどの名で呼ばれていることを知り、ヒン

ズー教徒の聖木ともされ、花や果実はヒンズーの神々の供物とされていると聞きました。

わが国へは、異説はありますが、平安時代（九二〇年前後）に渡来したそうです。

和名のザクロは「じゃくりゅう」から「じゃくろ」そして「ざくろ」の転訛といい、石榴・柘榴・安石榴などの字があらわれ、榴だけでもザクロをさし、梅雨時の深緑の中に咲く、この木の花を榴火というのが、その例の一つです。安石榴



榴火とも呼ばれるザクロの花



ザクロの果実と種子

は、この木の中国名、安石（安）は、西アジア（西域）の古い国の当時の中国の呼び名によるという説があります。

この木の枝には肌に触れると痛いほどの刺状の短い小枝があり、古木になると幹に瘤状のものが多く床柱など装飾材として用いられることがあります。が、この木の主役はこの果実と種子。たいいてい果樹は花卉の外側を包む萼という部分は花弁が散った後に地表に落ちるか、果実の枝に近い基部にくっついているのですが、ザクロでは果実の先の方に六裂した革質の萼が残存し、果実全体を特徴のある形にしています。果実の内部は薄い隔壁で仕切られた六室からなり、各室に光沢のある赤色の種肉に包まれた粒状の種子が多数、詰まっています。完熟したものを採取せず、そのまましておく

られるようになります。この種子を生食したり、汁液を清涼飲料、滋養飲料に、果皮や根皮を染料、薬材とすることは、インドとその周辺、中国、わが国の共通点です。国訳・漢訳の仏教経典にも、石榴漿、石榴蜜漿、安石榴漿、などの名でザクロの種肉からつくられたジュースを行法（修法）の供物、比丘や比丘尼にも許された滋養・薬としての飲み物、食果としての石榴の字も登場します。なお、多くの呪詛法を説く仏典中われわれに災厄をもたらす鬼を鞭打ち払うために石榴枝を用いることも見られます。よく知られた盂蘭盆中の「お施餓鬼」をなむ「施餓鬼法」は柘榴樹の下で行ってほならないことになっています。息災・増益のご利益があり、除疫病法、除鬼病法、長寿無病法などの行法の本尊ともなるという四臂の葉衣観音の持ちものうち吉祥果と呼ばれているものも、その図像で観た形状からザクロの果実であろうと思われる。

ザクロは外来の植物ですが、古典果樹となりつつあり、最近では、高野山の近隣の地でも少なくなっていますが、夏の陽光を浴びて果実が毎日におおきくなる季節です。

緑陰・涼風の高野山霊宝館で、ゆっくりと「高野山の名宝」に接し、混乱・混乱の時代を安らかに、和やかに、いきいきと暮らす糧としていただければと願っています。

連載

高野山の名鐘

其の10
大円院の鐘

霊宝館副館長 井筒 信隆



滝口入道と横笛の悲話の伝承がある。この大円院の庭先に鐘楼がある。その鐘楼に通高約一メートル、口径六十センチの簡素な梵鐘が懸かっている。その鐘の池の間の第一区に「紀南山清浄心院谷 無量寿如来堂前鐘」という銘文と、貞享五年（一六八八）九月吉日の鑄造制作年銘が陰刻されている。江戸時代前期の数少ない制作年が明らかでない貴重な梵鐘である。第二区

大円院所在、元清浄心院谷阿弥陀堂鐘
激動を乗り越えて

から第四区にかけて梵鐘の制作に對して結縁者や結衆寺院の銘が陰刻されている。第二区と第三区の池の間の縦帯に「紀州有田郡石垣庄徳田村鍋屋與助浩之」の銘があつて、梵鐘を鑄造した鑄物師は有田郡石垣庄徳田村の鍋屋與助であることを伝えている。

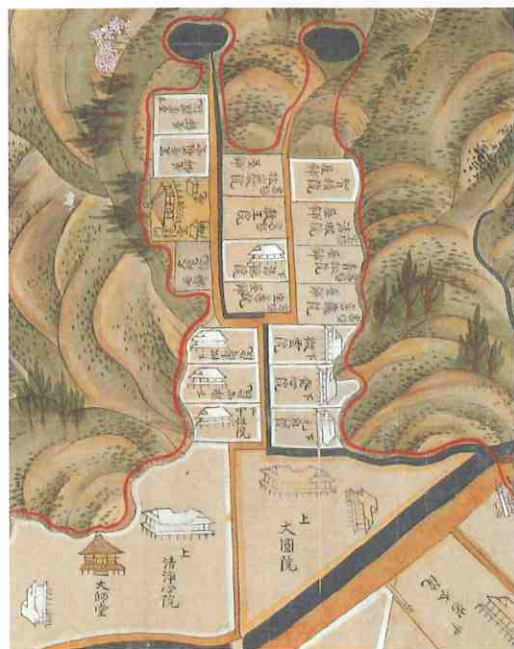
坪井良平氏は『高野山の梵鐘』の中で、この梵鐘は石垣庄金屋の大作の作品として現存する唯一の在銘のものである点から誠に貴重な梵鐘であると評価されている。また、同氏は、有田郡金屋町糸野の明恵上人の八所遺跡の寺院であるとされる成道寺に、高野山の五の室谷に存在した西光院の梵鐘で、南北朝時代の正平二十一年（一三六六）に制作され、文明十八年（一四八六）七月に、金屋の人々の合力によって金屋の地に移された追刻銘文がある梵鐘を紹介



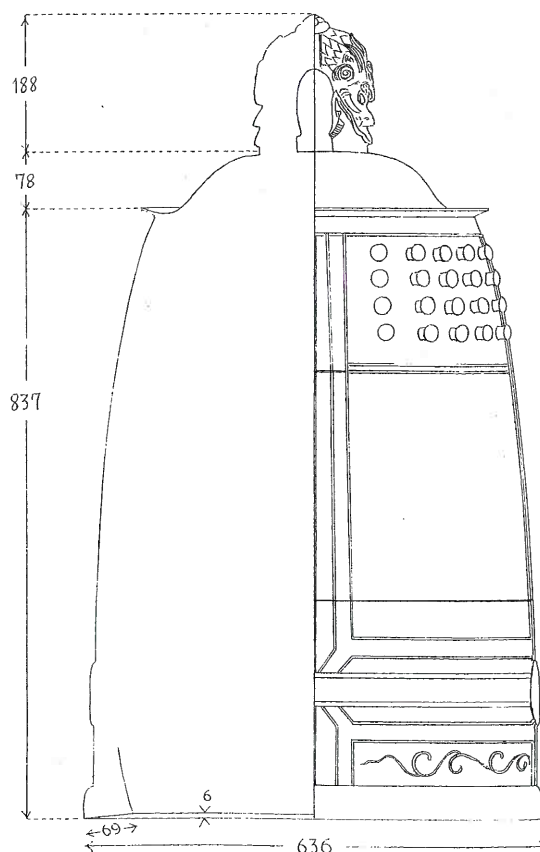
されている。その梵鐘の銘文によると、文明十四年（一四八二）四月から十七年（一四八五）十二月まで高野山の法印検校職を務めた湯浅出身であった西光院快算の縁により出身地の金屋の地に移されたことを伝えると教示している。また金屋という地名は鋳物師の住地を示す地名で、全国各地にその

例があることから、その鋳物師集団の存在を知ることが出来ると指摘されている。

大円院に伝来するこの梵鐘は、その銘文から一の橋の傍に存在する清浄心院の北東の奥にあった阿弥陀堂の梵鐘であったことが明らかである。阿弥陀堂は、江戸時代



に存在した大円院と清浄心院の間に存在した道の奥に存在した堂で、江戸時代の絵図には宝形造の建物が描かれている。その境内に



は鐘楼に懸かる梵鐘が描かれている。阿弥陀堂は明治時代の初期まで存在していたことが高野山に伝わる絵図類により明らかである。ただし、明治時代になると寺院や院中谷のお堂の統廃合で阿弥陀堂が取り払われたようすが明治時代の絵図で確認できる。

多分、この梵鐘は明治期の高野山の寺院統廃合などの激動の時期に、一の橋の傍に存在していた大円院の所有となったものと思われる。さらに大正時代になって、一の橋の地から大円院が現在の場所に移る際にも寺宝として梵鐘も移され今日に伝わったのであろう。

高野山幼稚園の地蔵尊

名迫地蔵

今回は高野山幼稚園にまつられている石の地蔵尊のお話です。幼稚園は霊宝館の東側に位置し、園舎の奥には運動場があって、その南側の一段高い場所に、今回ご紹介する地蔵尊がお祀りされています。

体と台座とを含めると、約一九〇cmとなります。石造の台座基壇三面（下から三段目）には銘文が刻まれているのですが、剥落している箇所も多く、かろうじて判読できるのは、次のような文字となっています。

地蔵尊は右手に錫杖しやくじょうをとり、左手に宝珠ほうしゆをのせて蓮台に座しておられます。像高は六〇cmで、本

右面「□國富□往・郎右衛門□光」
正面「廻先祖・菩提」
左面「申載・四日」



高野山幼稚園の地蔵尊
園児を見守るようにお祀りされています。

しかしこれだけだと、その内容をすべて理解することができません。

高野山幼稚園は昭和八年（一九三三）四月に、現在の高野山大学正門内に建っていた金蔵院の屋敷を利用して開園しました。当初は高野山保育園と呼んだようです。この時、園内に地蔵尊を安置することになったのですが、新たに造像するのではなく、奥の院の無縁墓地に祀られていた地蔵尊にお越し頂くことになりました。当時は台座の銘文がもう少し判読できたようで、地蔵尊は名迫伊光なごせこれみつという

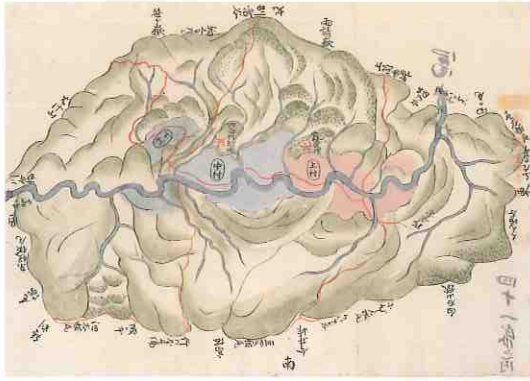
人が江戸時代に造立したものであることがわかりました。

名迫伊光とは

幼稚園の地蔵尊を造立した名迫伊光は、村の飢饉の際に自らの財産をもちげうって農民を救い、地域の人々から高野の生神せいじんとして祀られた、「名迫大明神」その人でした。一人の人間が生きながらにして、実際に神として崇められるまでには、いったいどのような事柄があったのでしょうか。

高野山の麓には、同じ高野町内に富貴ふきという地区があります。富貴は高野山よりも和歌山県橋本市や奈良県五條市、吉野郡などにも隣接しており、江戸時代には筒香つつが、矢取やどり（宿）、桑原などの八カ村を富貴（蔭）村と呼び、高野山の寺領として学侶方十九カ院が領主となっていました。地勢は田畑が広





富貴村絵図
元禄頃の絵図で、同じ富貴村でも筒香地区を中心として描かれているようです。



高野町東富貴地区（富貴中学校より撮影）
名迫家は地区を流れる丹生川の始点に位置しており、今も立派な長屋門が目をはきます。

がる山間の盆地で、比較的寒冷地であることから作物が育ちにくく、昔は田畑の他に薬草や茶などを植えて生活の足しにしたということです。

名迫伊光は、富貴村の庄屋である名迫家二十六代行卓の一子として、慶安元年（一六四八）に生まれたとされています。幼名は亀次郎、大きくなるに従い次郎右衛門、元服して伊光と改名し、さらに僧侶となって覚性（戒名か）とも称したようです。晩年には生神として崇められた伊光でしたが、若い時には傍若無人な振る舞いや、賭け事などに明け暮れ、親や人のいうことを聞かない人物であったといわれています。そんな伊光でしたが、

父親の行卓が五十八歳で亡くなったのをきつかけとして、人が変わったように一生懸命に働くようになったのだそうです。

富貴村の大飢饉

西日本一帯をおそった世に有名な享保の大飢饉は、享保十七年（一七三二）におこりました。これよりさかのぼること十数年、高野山周辺では正徳四年（一七一四）から享保三年（一七一八）にかけて大干ばつが発生しました。雨が降らないことで農作物が枯れ、穀物がまったく穫れず、村人たちは食べるものがなくなりました。ついに藁を煮て食べたといひ、それさえも底がつくと、今度は露や

蕨、蓬の根までを掘って食べたのだそうです。富貴村に約百軒近くあったという民家の内、五年間で二百人余りの餓死者を出し、離村するものも出て、村の大半が空き家となったといわれています。

伊光は庄屋の家督を継いでいましたが、あまりの悲惨さに一旦は自らも村を離れようとしています。しかし残っている村人を放つてはおけず、村を代表して領主である高野山に対し、年貢の用捨と救済を願うことになりました。当初、伊光たち村人の願いは簡単には聞き入れてもらえなかったらしく、その訴えは二千度にも及んだとされています。二千という数字は、実際の数字というよりは、「幾度

も」といった意味だと思われるが、高野山側としても富貴村だけが凶作だったわけではないということ、決まった年貢米があがらないと寺院を維持することができないので、容易に認めるわけにはいかなかったようです。それでも

伊光の再三にわたる訴えは続き、ついには、高野山の検分役人であった明王院良照という人が富貴村へ派遣されてきます。良照は想像を越えた村の惨状を目の当たりにし、自らの立場も忘れて、所持金を村人たちに分け与えてしまったと伝えられています。こうして富貴村の現状に嘘偽りの無いことを知った高野山年預坊（役所）は、さっそく九石七斗の救米を出すことにし、享保四年（一七一九）二月には十年間に及ぶ年貢の用捨を認めました。

伊光の徳行

富貴村は伊光の行動と指導によって飢饉を乗り越え、時間と共に村は安定し、栄えていきました。この時、伊光によって、従来、「露」と記していた地名を「富貴」に改められたと伝えられています。その後も伊光の徳行は枚挙にいとまがありません。困っている家



長屋門や土蔵などが残る富貴村大庄屋名迫家
主屋は平成10年9月の台風で倒壊したそうです（近所の方談）。在りし日の主屋には大玄関、中玄関、中段の間、上段の間などがあり、座敷の回りには広い縁が設けられていました。玄関の登り口の部屋には大床があり、ここには槍や十手、コトジなどといった召し捕り用の道具が順序よく掛け並べられていたということです。これは名迫家が、今で言う警察署の役目をも担っていたからで、実際に裁決する場合は、上段の間に高野山の年預代が坐り、中段の間に胡乱方と呼ばれた裁判という検事である名迫氏、控えの間には村役人、縁側には取方が控え、罪人は中庭に引き出されたそうです。

があれば無償でお金を貸し与え、村の寺院再建から、神社仏閣への奉仕など、あらゆる慈善事業に取り組むようになりました。領主である高野山に対しても、決められた年貢を納めるだけでなく、少しでも余裕ができると奥の院参道の道普請や掃除料として、金品を寄付することも少なくなかったようです。その結果、年預坊の伊光に対する信頼は厚くなり、ついには富貴村の代官として取り立てられ、田畑の毛見や家造り、道普請、用水蓄池等の見分奉行にまで任命

されました。

時代背景的に見ると、当時は豪農や村役人の不公平や不正が横行し、「村方騒動」や「越訴」が頻発した時期に差し掛かっています。村役人となった伊光でしたが、自らの立場を利用して暴利をむさぼることをせず、己を顧みず民百姓のために働いたことは、近隣の村々の見本ともなりました。こうしたことが伊光を偉人として認識する素地になったと解釈することができます。

ここで代表的な逸話を一つ紹介

したいと思います。隣国の大和に、ある貧しい人がありました。その妻は長患いしていたので、決められた年貢を納めることができず、最終的には村を出て行かねばならなくなっていました。村役人としても、この一家をなんとか助けようとはしますが、それぞれに余裕のある身分ではないので、どうすることもできません。そうした時、村役人の一人が、紀州の富貴には、なんでも奇特な翁がいて、困っている人がいれば助けてくれるという話を聞きつけてきまし

た。ところが肝心の翁の名前がわかりません。地元では有名な翁であるうと、とりあえず村役人を伴って富貴まで行ってみることにしました。大和五條のクロマというところで渡舟に乗り、そこで乗り合いの人たちに富貴の翁のことを尋ねると、その中に一人のみすぼらしい老人がいて、「何の用事で富貴に行くのか」と逆に問い返されてしまいます。他にも人がいたので理由を話さずにいたのですが、あまりに老人が尋ねるものだから、仕方なく訳を話すと、「その翁とはわしのことじゃ」というやいなや、袋から金包みを四つばかり取り出して、今日売ってきた茶の売上金を差し出しました。伊光は名も知らぬ村人に対して、手形も取らずにお金を貸し与え、さらに急ぎ帰るようにすすめたとい

います。

名迫大明神となる

伊光の徳行は、村人や領主から神社役所へと伝わり、最後には幕府から褒美が出されたほどであったようです。村人たちはそんな伊光に対して、信頼感以上に、信仰



名迫明神社の社殿
名迫家より少し離れた山の斜面に社殿が祀られています。



地蔵尊の台座に刻まれる文字
左上は正面
右上は右面
左は左面



名迫家の墓石
向かって右の宝篋印塔には「覚性」と刻まれていることから、伊光の墓であることが分かります。寛政8年(1796)に名古屋の錦屋忠兵衛という人が、伊光の墓石に生える白っぽい苔の様なものを服用すると、「食道癌」に効くという夢告げを受けました。そこで実際に苔を求めて服用すると治癒したという話が伝わって、以後、諸方から苔を求められたことがあったようです。

名迫家から二人の生神
伊光の孫にあたる行雄という人も、実は生神として祀られました。名迫家から二人もの生神を出したことになり、昭和7年(1932)11月25日の毎日新聞に取り上げられたこともありました。行雄は天明の大飢饉の際に、祖父と同じく村人を救ったので、富貴村の守護神として祀られたそうです。

に近い感覚を持っていたに違いありません。伊光が七十七歳になった頃、村の有志四十五名によって、伊光を神と崇め、「名迫の宮」の神殿を造る計画を高野山に申し出ました。直ちにその願いは認められ、翌年には神殿が完成し、次いで高野山の北室院廻遍ちゅうべんなどは、享保十年(一七二五)に伊光が名迫明神となったことに対して、本地仏として地藏尊霊像を贈っています。そして、遍照光院、蓮上院、薬師院、竜光院、勧喜院、阿光院、北室院、高善院、般若院などの山内寺院が集まって「地藏講」を行

うべきことを定めています。伊光自身が生きている段階で、本人を地藏菩薩の化身として、地藏講を行ったということには、まったく驚くばかりです。伊光は生きた神として周囲の人々から崇められました。本人はというと、相変わらず粗末な衣服に身をつつみ、朝早くに起き出しては、従来と変わることなく仕事をしていたようです。毎朝、薬わらを打っては縄なわを作ったためおき、年の暮れになると縄を大阪へと売りに出しました。そして、その金銭をもって、困っている村人

に対して施しを行ったのださうです。

再び地藏尊の台座銘文に解釈を加えてみますと、地藏尊は次郎右衛門である名迫伊光が先祖の菩提のため、「申まを」の年に建立したらしいことがわかります。伊光は享保十五年(一七三〇)四月二十八日に逝去したとされており、これに一番近い申の年とは、享保十三年(一七二八)となります。翌年の享保十四年、富貴村の人々は永く「名迫明神権現様之奥院地藏尊様」へも参詣することを誓った記録が残っていますので、地藏尊は遅くとも享保十四年には造立され

ていたこととなります。名迫伊光の地藏尊が、幼稚園に祀られるようになったのは、単なる偶然なのかどうかはよくわかりません。幼稚園自体は昭和四十二年(一九六七)六月になって現在の場所に移転新築されましたが、同時に地藏尊も移されて今に至っています。人々を救済し、神として崇められた伊光の地藏尊が、時代を超えて今日も園児たちを暖かく見守り続けています。昭和八年当時、地藏尊を奥の院から幼稚園に迎えたのは、伊光が造立した地藏尊であることに、その意味があったのかも知れません。

前霊宝館長 長澤光倫様のご寄付で石楠花植樹

前霊宝館長長澤光倫様より石楠花一六〇本をご寄付頂き、霊宝館前庭へ植樹いたしました。霊宝館における植樹は、大正十一年（一九二二）の山桜、カエデ各二百本などが高野索道で山上まで運び上げられ植樹されたのが、現在の庭木の基本となっています。

石楠花の植栽は大正十二年（一九二三）三月十六日、高野営林署より石楠花を貰い受け植樹されたのが始まりです。高野山では金剛三昧院の



東屋横に植樹された石楠花



石楠花が有名ですが、霊宝館中庭の石楠花も見ごたえがあります。開花時期は五月の連休頃です。

石楠花の名前は背丈が低いある種のようにすから、「尺なし」から「しやくなげ」になったとの説もあり、また、漢字の「石南花」は中国産の別種ですが、誤ってこれを用いて「しやくなげ」となり、しだいに「しやくなげ」になったとも言われています。

霊宝館の前庭には、ノムラカエデという春の発芽時に葉が赤く、夏には緑色、紅葉時には鮮やかな紅色となるという特徴のあるカエデもあります。

東屋もありませんので、是非一度、石楠花やカエデに囲まれながら休憩して頂ければ幸いです。

モリアオガエルの産卵



木の枝に作られた卵塊

霊宝館敷地内、収蔵施設である大宝蔵と小宝蔵の間にある小さな池で六月末にモリアオガエルの産卵が始まりました。

モリアオガエルは体長オス四cm〜七cm、メス六cm〜八cmほどで、メスの方が大きく、指先には丸い吸盤があり、木の上での生活に適応しています。背中側の地色は緑で、体表にはつやがなく、目の虹彩が赤褐色なのも特徴です。産卵にも特徴があります。カエルは水中に産卵するものがほとんどですが、モリアオガエルは水面上にせり出した木の枝などに粘液を泡立てて作る泡で包まれた卵塊を後肢でかき回して、直径一〇〜一五cmの真白い泡状の塊をつくり、その中に約三〇〇〜五〇〇個の卵を産みつけます。一週間から二週間ほど経って卵がふ

紫雲放光

化します。ふ化したオタマジャクシは泡の塊の中で雨を待ち、雨で溶け崩れる泡とともに次々に池に流れ落ちます。オタマジャクシは一〜二ヵ月ほどかけて成長し、幼蛙となって森に帰っていきますが、ヤゴ、ゲンゴロウ、イモリなどの補食を免れたごく少数のようです。

ちなみにモリアオガエルは天然記念物というイメージがありますが、自治体によっては「天然記念物」に指定されている場合もありますが、高野町では指定されておられません。

「盆と正月」という言葉が聞かれるほど、日本人にとってお盆は大切な行事と考えられています。正式には「盂蘭盆会」といい、元々この言葉は梵語（サンスクリット語）で、インドから中央アジアで呼ばれていたとされています。

お盆の習わしは、各々の地方（地域）の風習によって多少異なりますが、一般的にはどこも同じで、先祖を迎え、食べ物を供養し、送って行くという意味で行われています。

日頃のお礼の気持ちをご先祖様に伝えるいい機会です。新しく家族になった人たちのお披露目や近況報告・思い出話などなど、毎日大騒ぎかも知れません。手を合わせてご先祖様とゆっくり話をする時間も大切にしていきたいですね。